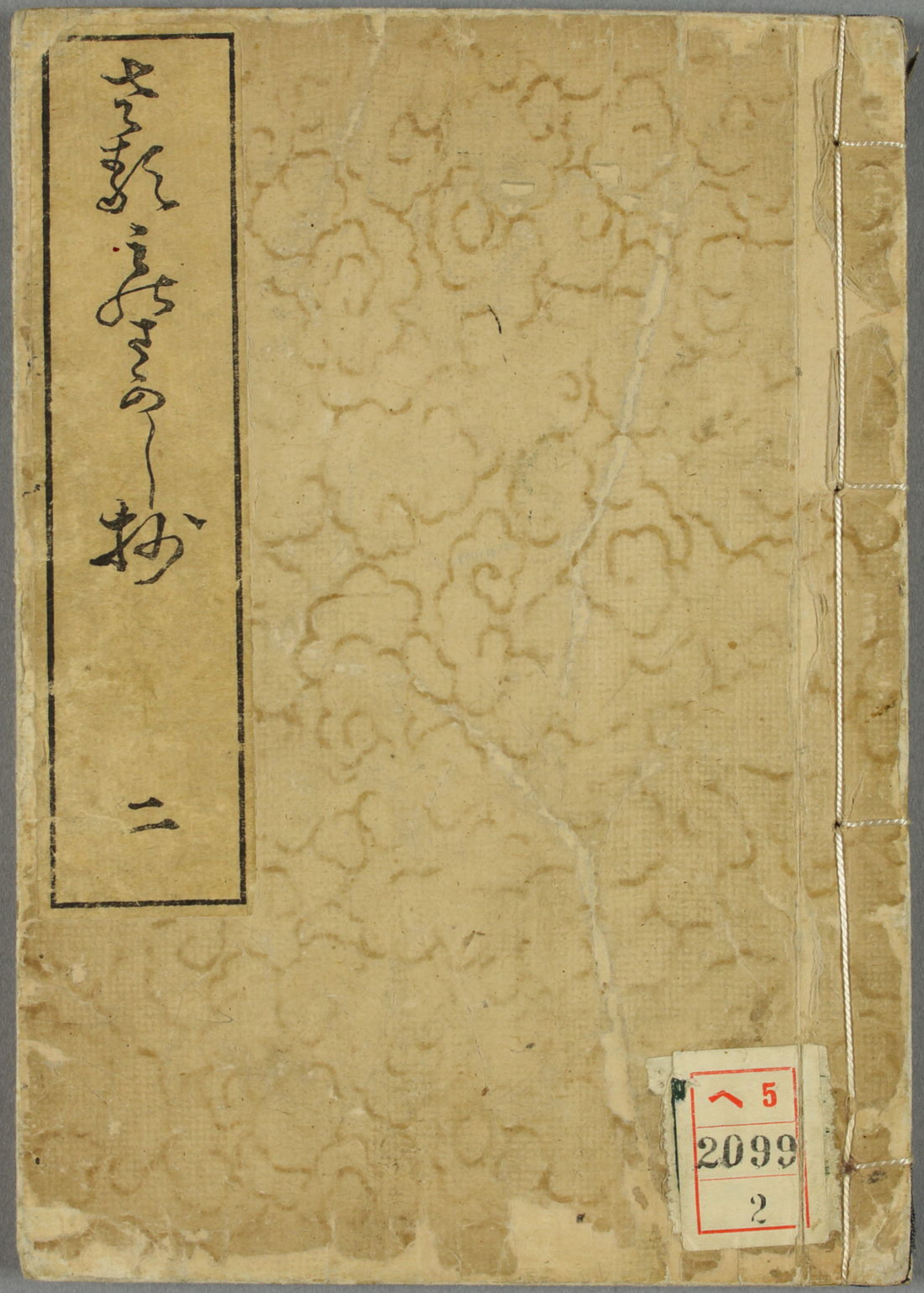
ヘ5
2099
2

門 利 5
別 2099
巻 2

猿蓑逆志抄巻之二

冬

初しぐるゝ猿も小蓑をほしけり　芭蕉

此集ハ祖翁彩風興ニ最専ニ集ヤウニ撰ミ去ル去ル凡非ナリ〳〵いへども祖翁の指揮ヲ生ル所ニ成ルヨリテ祖翁美彩の余匂専ニ其角ノ奇匂深ク意味ありて是ハ

ものゝふや扇ヲ折る小江湖集永明頌云孤猿叫落中岩月野客吟残半夜燈。善會大師語云猿抱子歸青嶂後鳥啣花落碧巖前雖猿但無心而啼旅客愁人因已心中有愁聞之則断腸生愁此愁恨全不干啼猿何者猿一向

無心啼故不知愁也又云啼猿非首恨行客自多愁廣
聞和尚頌云越山入夢幾重々歇處應難忘鷲峰後夜
聽猿啼落月又添新寺一樓鐘此頌霊隠猿一樓鐘を
悲聽する頌なり猿鐘一對の作猿の老以の二句を裏字なよ
りて一句一句探られ貞享元禄の雪江間集成して浮林の詩
なるなら猿を主とし祖翁の俳を見るようなるべきなり
彩風の俳句仏聽を主とするなるべき歟一句集
乃頭号世句子部をりさを点ハ字へたる表作ふ一句
猿の巖下ふはぐをそぬれぬるふを眼前を見て時雨
の寂一句仏の心とをくさむきを人の心成動ハ布一けん
らふをなをの現力をしてまつはのぬるらふ趣一

この句ほ一けんの五文字ふ硯の入るを古説を定ふ人の
篠ためて寄ふ弓はれ物の事ひたひを布一乃ほ一けん分
とふ歌成引て翁を古を取て猿を人を似とふるなれ
ハふ墓をわ一けんと猿をう声一なりといりを古を
取らを評一又ハ猿を人を似なるいるを祖翁ハ俳力
成貶をふ抑りをふ古弱なりを思ふ趣ふ成再三吟
一て言外の余を時雨乃ふ初乃字を字を表を味ふ
なを一猿を以て弁翁やを俳を兼て風猿劣を趣一
初の字ハ蛙てを外仏得るふを表を表を表を表を賞歎
此字を表得趣を表なのを仏向翁ハ伊ハの山越一乃付
乃吟ふ一て巴峡の啼猿ふを成すをいを猿

客より異ひ小墓ばかりなるの中に含て情緒あ
る時ふ趣

あをいやまけと時雨はるる松の清の夢　其角

遵生八牋五云水樂洞雨後聽泉豈無耳哉更當不
以耳聽以心聽といつまよ法ぞ人乃見ず樂し愁ふるるハ
心ばかりて本しす眼耳口鼻ハるみとみとの完ふして色
慧門の句を作る乃本なり故に此句心雖の句とふ心を見
ふるるといふ所一乃工夫ふ家彼金屑して姑て祖
翁の俳諧を語る趣世句皆子ら逸興和尚寒寂乃
風情一ばのうつに逸ちの清乃夢ふ清く秋時雨の板庇

冬三

手ばるる春日割子を洩り来る風の燒火ふさるるまて云
外の除情趣かくて実に一時の秀逸ふ新趣　古強
ふ小墓の白ハ竹葉ばかり父ふして世句ら舟なり次くの句ばば
春出すえあをやと心ふ感ふる清の彩ハ姑蘇城外のあやと
ばかりふ三井の清とハ多くとも姑蘇城外のあやと
姑蘇城外寒山寺。夜半鐘聲到客船と作る張繼ら詩
乃句ば取て住ふるふ言外の餘韻ふ味ひて探ふ多くて予等の餘情を味ひて後尾久の子輔更と
訪ふるるばり更書ふ自函燈の一軸を持て蔦のかかるる柱に
九月ひをかけてそれふ燒火を點ずして其上ふ句を書ふ余
情暗かかるる道ふ志のふ後とひと背燈すばを生けるの

おもなる船たりと時ふ分〳〵まる於て〳〵ふ姿情備るり

時雨さそ荇ひかゝる鮒　千那

鮒ハ俗字なゝイサゞと訓す唐土ゟ鮒といふハ鮫のるゝく
と心ゝ得ゑ〳〵此句の鮒ゟ江州和爾ゟて多く取て京師
ゟ賣るゝ一名サノボリと云湖ゟ産なり也さ一すゞこるゝふ
〳〵て頭まゝ〳〵てハゼに似り濱名ハ洋ゟなるゝぬるの
なるゝ句ハ字〳〵ゟる作ふて鮒ゟ産ゟ舟の時句ゟたえゝ
ゟて荇ひゝかれたる湖水ゟ風景夕陽ゟ伽〳〵て序時
句の序ゟるゝふ漁舟の場り故備ゟる遠雨ゟ眺望言
外ゟ見ゟり時句ゟやゟるゝの二字魂ゟえる句〳〵只今

時雨の降ゟ〳〵る村雲ゟ乃ゟ毋ゟ出ゟ歌南去北来
人自老夕陽長送釣船歸といふ杜牧ゟ詩の趣ゟ通ひ
て夕陽ゟ故雨に加ゟ〳〵る〳〵ゟ伽ゟ物ゟ弁ゟ費〳〵句ゟ故害
ゟ形ゟ恐る鮒ゟ弁ハ多識論ゟ出す

幾人ゟ〳〵ゟ〳〵ゟけぬく勢田乃橋　僧　丈艸

世句ひえおゟ〳〵ゟ村〳〵ゟの序ゟるゟま風景〳〵ゟに
長橋〳〵云勢田乃橋ゟ〳〵ゟれハ句ゟ〳〵ゟ〳〵ゟかけぬ
くゟふ所ゟ歌ゟ金葉集ゟ幾人ゟえゟ山ゟ〳〵ゟの
ゟ来て志ゟゟにむゟふ勢田ゟ橋といふ故俳諧ゟ形
ゟるゟの句ひえ山おゟ〳〵故ゟみふ持て橋渡ゟの眺望

と眼おふありかけぬくら舞とひゞくまふえたなきも

錢指乃錢振らつれし面影　膳所　正秀

錢振たつるといふ和錢の字魂之鎗指乃錢振なるとよく
魂ハなかる趣しよろし味ふて知るべし鎗錢の奴がむら
しろきのむかふ風にいなめしくも沢ひとつなる三(サン)の推(ズイ)まで虎
ひつのひげべんかし色の勝(スキ)ちて銅造乃大小に大刀毛れ
伊達なるを見んやとて来りてたぬやうに見へて魂の入りし
洒落のあつらふ錢乃一字にてみへ哉なれ

廣沢やひとり時雨し沼太郎　史邦

沼太郎ハ一名あをひしといふ又さらぼうともいふ鳥にして
其形大鵠常の鷺よりも大にして眼の上にうす白き條(スジ)あり
白鳥ハ人名とせしよる沼太郎ハなだぬまとしるみに鶴と
いふ和魂ありてさる趣し沢田の雨中鶴見ゆるかなし雁
鴨枯芦枯荻堤乃枯柳にいたるまで景物條情に備わり
ひとり立た只その中にわたりてしみなくるあへふ白ミ取る之廣
獨の影合せみ廣沢と云ふかれ廣沢の池ハ山城國之

寺人やぬらしまて棄し時雨哉　尚白

ぬらしまてハ半ぬれてといふなるべけのあるらんと思ひ当り田へ
思らすやよふ哉寺人のかけ合て棄せしゐしきまま

たりされとくらもぬるもちろんこゝ水ばの風景
船中の情面白く好興なりしかも白乙とはいふ無
ぬるもて楽しう眺るとは付ハ俳情なり

伊賀の境に入る

なつかしう史ふるこの地俳の一時雨　曾良

伊賀の境に入てとなる時付ハ一句落着やあ故に書る
ちう古注なつかしきの昔乃京と此詞をこれと
いつて此句ハ時雨の侘しきよりも奈良の昔の京に異
思ふ風情なり時雨の降ふるつゝやの五文字を白ぬ
ちうこゝ京の都を

異なつかしきこゝを此句に付雨に降ふハいふ計
う情四乃異なるまを表ふさハなくて伊賀の境
をまもりて此時雨に降ふハまぶしもなるの俳心
異ハ好者を思ふ情乃やるもちろんこゝ

時雨るや黒木つむ屋の窓ちかし　凡兆

此句つくるを思ふ付句の如ハ此歌を関家の
内よりを詠めるを作之黒木のひぐきを表の義の
かりと薪の字ハ含るとゝる竈さ気を付句ハ
窓ちかしふ姿情を備へ

黒木ハ場所にて
東つむ家ハ場所にて

馬かりて竹田の里や行時雨　大津 乙州

竹田の里ハ山城の名所なり　さるかりてのてにをは字濁りてよむべきを句の清濁にて句意違ふ事あるにより句意ばかり味ひのち清濁ハ定むべし　濁点なくしてハ清濁さだかならざる句多きハ　まバでとよまん事からでとすべきをかりてとはりてハ清ムべきよろしくふ説あれどからでとハあやまれるぶりて心よろしからず句意ハ馬をかりばふたどるしもや日もたけぬるとふ意にて乙州が竹田の里へ行て時雨に行あふる即興を吟ずる　村時雨の句ふして　幾と行とかけたる句也　行の字をいくと読る萬葉集の例にならへるなり　日の字旅情に吟ずるを

づまし流志云芹川の竹田などよみし古歌もある芹川家も同所河原吉凶あり　掴句よ上ハ木幡乃里に馬ハかるべきの侍ありてさこなうら古歌に旁とみゆげなきことさらなまき大津の駅繁昌の地に住ちしての時雨にあひて勝かくる芹川の河原つゞき古名侍へ来て竹田の時雨に遭ひいづれも佳しきのあまりに碑勝も旁をもて馬かりて行程に勝も止ざれた馬もせふなるふぬれこいよりこそ実情を句になしたり　借乃文字魂とおの何やら有気なる　探らんハ乙州ぐるしくゑにおかししや思ハん　梅薫志云　山城の木幡の里に馬ハあれども　ふ歌坂庵気に含されハ君を思へハかちで跣出て行なれど馬ハなれ下りあつて馬ばかり借てかへんとは一将しけるも不備侍　俳諧

のよ縁なく趣なきを也外田とせしハ外馬と枯れたる縁
ある故なり此両士の説いづれも一理有て咎むべきにあらねど外田
の里と云所穏ならず汝抑に非を以てまる時ハいつまでの名
にても推付るべきなれど自然の所にかなふべきにあらねバ知れあるべし
外田の里の本情の里にふれ雨坂の白川此関に始れ松島の象
浮ぶにあれ吉野のさくら朧に見てハ詮なし されハ何で名所
の句ハ儒接なりとていふめる人ありてむつかしき事なれど
なるべきなれど今の初心なるもさあれバ名所を云生すべきま
しきわざなり云けるあいもとより知れたる道なし此句の外田
も動かぬ者なるぬ外田なる趣し されど予みき言を詳
らかにせざれハ詮なし句の面を考ふる時ハ馬かりてしハ本情

の里にてかちならバ杖つき坂と云所に落馬の句を摘て
俳諧俗談につゞめて五文字に置したるなり されハ馬借てのるハ
濁りて讀べし何の仔細もなく落たる也是ちかならバ只歩行(カチ)
にて行べきをなまじひに富士深きなりしに乗りて杖を突て
行ぬべきに乗てあしき本情の歌の作をとりあへてすでなし
驚でなし膝栗毛をたよりける杖の外じやこの一句を力に
してたぐひなし幾度か村時雨にあひてこの杖を求めたり此
迷情を一句に云おおせるにて其に義理なるべし
杖の外田といふにして外じや外じと通る語也杖の字
紋着きたるすぢを曲てこれ等によりて外田の里と向
作せし所優に吟ずるも押しなべて本情なれども茅川へも

姉さあ外用乃外の字を俗言みみ探り求るハ人々
の心ふあゝ面――句敷蕉門ハ係ふる句ふて其角
乃姉を導ふるゝ之さゝ点ハ俗人ふ句敷乃て表
裏を以て句言を二段ハ味ハざれハ深言を図ハず――
又言ハりて蕉門ハ書ふ書ハ同じての字ふれた情
て情ハりとより之句の閣ふ赤もくとと知る角――予家
ふ蔵着ふ拠後完の説を俟て断ず角――

たてまつるゝ――星乃光りや少秋――金　羽紅

て秋ハ俗まゞと星のゝりふ之定めふるふくゝ
ふ秋――ふれふる上の五文字ふて句成ふ

新田ふ稈殻燻るゝ――ふるゝ乳　膳所　昌房

さゝくたる通りふて田ふ村――ふの閑寂ふ物売ふ
ハふ拠ふ――稈ハ殻ふて句成ふ――ふ新田といふ
に趣出ふたりと知る角――

いとかゝ――や仲の時雨乃生ふ帆行帆　去来

上の五文字にて句成ふ――たゞ仲乃時雨のふ毎ふ
望眼前ふるふ――去ふ云猫ふ乃ハ新風の始時
雨ふ世業の美自ふるふと句仕換――侍るたゞ――雨
や行帆ふうけて一付句といふ心の移ふりみかゝん先

作云はの吟ふ〜ふも又一ふ〜たるさ〜さを〜向ハ遥
ふれ〜ゆる〜侍る之去来抄

初雪ふ行やわ子ふ星乃ゆ　伊賀百歳

雪の降ま紀わ子のさ〜〜〜〜光り渡るさ毎ゆ尺〜
作をゆ句ふ〜て北子ハ人君ふたゝふ句ゑハ君ふ勤仕
をるに扶のひまゝ吹やらぬふ雪れを踏て君前一仕候する
ゆ形容〜〜〜と吟ふ句〜〜尽の前をいふ雪ふ姿情ハ白
雪紀之東方未明顛倒衣裳顛之倒之自公召之と云
詩経の意ふも通ひたるを〜ふ出仕すれ人の姿情言ふ尺之
わ〜〜〜て異ひやら〜〜の句之と吟ふ〜〜

ゑ〜〜色も変〜〜ものち〜雪ふ歌書　野水

公句雪扶乃実情影ふ移ふる句潤之風ふ雪紀ハ雪ふ
雪ゆ紀星乃ゆな〜〜雪ふ吹ハ遠ふ扶ハ極て風ふ〜〜静ふ
ものなをハそこゆ實意ふ雪ふ吹ふ侍に句作れる之雪の志ふ〜と
置廃すふ者ゆ月ふさ〜〜〜〜みを〜ふ雪ふ寒ゝ夜乃景色之
ふふ探りて味ふ興〜〜

淀にて
初雪ふ何と扶〜〜扶て子乃中　甚角

雑狂云〜〜古ふ特の影ふ子ふ中の中に八何と扶ふる〜

笠は春雨のうぢ橋といふを取て庭竹川毋は嘉和
乃寒さは松ばりひえぐ〳〵しく西蕉の作之

海棠うれ水さうん　延切　同

白の表ハ延切也　与をちうしう海棠と延の切とを
かけ合せ小六月の天気をかんがへて延切も又百生んやと
いつるちう表の底をハ普子ら自得の白ふしてさかハも
さや海棠の咲付さくなきよ椿木ハ今海棠の咲るハ椿
木ハさくたるもの之ハ才のうへやと就志してうれみもさく
るもあるべハむ〳〵海いつてのるの名利を思切と深をを
合るもつ海の妙術と知るべし〳〵うんとハ不如といふ義

よ同〳〵ふ及とうみよ風をを切とハ名利を断絶する之
延と寧とかけ合るもふをとを味少べ〳〵寧ハ願の詞
ゆて壁ハ物二ツ付てれうハ此うをとをいふ言之公作
りと祖翁の俳言ふして書るふ多き白駄之

浮寺の松や蕉葉や　祇王　月　九兆

祇王月の浮寺と思合て祇王ハ歌浮寺ハ序之哲の
蕉葉ハ曲の場ゆて山寺寂莫乃風情要約の景色
多く水立の中ふ山門堂塔のさま眼前ゆるるが如〳〵清水ハ
蕉葉ハいふもよりて赤松葉の蕉葉なるべて浮院力
場ふ松樹のうるく従身〳〵ゆれ有さま他〳〵動〳〵角うん常

盤木乃葉をふ暮なんとす松乃葉をふ年節行くべきを
いふ〻〻ハ辭(ジ)なく以て志を害するに余り〻序論
曲のまゝハ自毎年備らざれハ斷(ダン)義なきと心得し

百舌鳥の為に那古中の杭よ十月　嵐蘭

世間向上の境にして祖翁彩層乃場之尚ほ其
室(シツ)ふのこゝいふ爲〻を機微の句とふ初心の巢ハ
いづれのおう初学毎みちるに疑ふ爲〻ハ云ふの風
系伝尋て新る翁〻ハ世もるの十月の爲に枯〻ふ
為る廣世のこゝ何とを見ても情日を傳すなるこゝ
ふ枯木のこゝゼ年賜乃已ゞ為なるハ実ふ

雅聲(ガセイ)人の腸伝断思ふ思ふ〻さらんや支本集、夜
笠右大臣賜の詩ふ技ふ莊もちるのれてなりふの系に秋
てふ主思ふ付歌のされなりて思合せる為教と云杭と為て
明彩ハ言外出る趣一

こがらしや頬腫病む人乃顔　芭蕉

風の吹きるる年虫歯のいたゝ伝かゝえみる人乃抑抑服為
なり人〻ふ心つぶる白葉ふして本枯の理伝教とさ主ふ
風乃勇を矢ゞ伝ふこがらしふ頬腫ちやみる人の顔と主
照君ふ胡思振〻馬上の姿といつ主ゑまさらん上陽人ふ
元ふ国ふふるふ為思合せ為一句の上ふ

男女美醜瘦肥はちかへれと自然に美婦人の容をそなへ
生れつきし人の顔ニ云魂ありと知る画し

砂よけや蜑のかたへの冬木立　凡兆

海濱なとの家居ハ砂よけといふものをかけてから風の吹つる所
砂をまくしかけゝ家居へ吹出るをよけるに延紙引張て垣
へかこふるなり又立木林に立かけてふせくなり是等ハ句ハ蜑か
家の傍なる砂よけにかけて垂る冬木立のさま大木ハ落
葉して枯しに冬木の青み有ものあり見ゆるなれは其様なし
こゝろにて蜑か住居の冬枯の景色言外に見ゆるか如し
蜑の哀をふかく余情あるハなり

なつかしき

棹鹿のかさなり臥る枯野哉　伊賀 土芳

かさなり臥るといふに魂あるかさなるにて左右の鹿を定め
爽日雅にハなつかしさり棹鹿ハ牡鹿かよみして小男鹿と云事
なり岂も男鹿とを中に入る事にして広く見る事をし詞
の趣あるんすを深して影作りさまて鹿の花といふなりハ
秋鼓鹿のこゝ聴ふ覚ゆる

渋柿をなかめて通る十夜哉　膳所 裾道

十夜ハ浄土宗の法会にして十月六日より十五日迄諸寺にあり

て無所を白浄へる仏ふして ちゑめて通るの示現なり 保
元八宗柿の張ゆ字ふ人心のと弱ゝゝ仏思会せ出ゝれ八種
佛心を起ゝ仏いぶゝふ邪見殘忍乃徒ゝなりて天地自
然の道理を無へ仏らゝしと日ゝ故ゝふ罪業仏あす仏
その佛心仏ゝるとのゝりゝ仏ちすふの白ゝと味ふ角ゝ〜宗
柿ゝたのめゝ人惑て美しゝく色仏ちゝた宗きゞ角ふゝう
うゝと校ゝ殘りて熟ゝる仏ゝるも性の宗より人ふ疎ゝゝと
いふ仏含ゝる白ゝ又宗柿の人惑ゝゝうゝと知八女人角たゝ
えゝう又親鸞上人の戒信ゆ柿嗜ゝふふ行者て角
とゝ乞ゝるふ上人の哥ゝ柿嗜ふちゞし角仏ゝりゝ八ゝの
の心熟柿ゝゝちゝるゝよゝゝゆゝゝ出ゝ合ゝ角ゝ〜

茶の花やかゝる人なき 美聖女 越人

美聖女八霊照女の誤字ゝ仏女禅仏学ゝて志ゝ比醜婦ゝ
さゝ生八詩ゝ作ゝて娶ゝる人なゝき茶の花乃咲ゝも人の愛で
角ゝ仏なゝ咲ゝゝる角ゝ仏ゝふ侍しげゝる又みゝゝ種
かゝゝゝ仏ゝと含ゝて茶の花ゝと美照女ふ尼ゝゝゝる撰合せゝり
霊照女八伝燈録ふ龐居士語録ふふ出ゝゝり仏霊照女朝夕
父龐居士ふ仕ゝて父ゝゝふ禅を学ゝゝりゝの父ゝゝゝゝ入滅の
期仏ゝゝて日中午時ふ寂ゝ角ゝしゝ美照ゝとして日ゝば
仏ゝゝせ〜めゝ〜ゝ美照いゝく只ゝ日中ゝくゝれゝど日蝕ゝ角ゝ
と出ゝゝ龐居士ゝを出て日ゝゝ〜仏ゝゝる八ゝふふ美照父

の滅坐(メツザ)をとり出けるに登りて合掌して入滅す居士踊り
入てこれを見て笑て曰く女かしこいものといふて七日まで化
せられ又天中記ニ茶ハ種をまきて生ずる時外へ移し植れ
ハさらにもち枯といふによつて婦の婚姻の時の聘物となす
婦嫁して心をふたゝび他の家へ再嫁を得ざるにたとへ
たるものを以て呉興女と茶のむしの掛合せるにつ傳ふる
まゝ此日本にても東北國にては茶を以て婚姻の志とした
所もありと

蓑虫の茶乃花ゆへ尓折られけり　伊賀　猿雖

茶の花に蓑虫とハよめる心ハ蓑虫のぼる向ふにして蓑虫の俳し
まゝに茶の花の俳しきに引(キ)掛て茶を好む俳人に引かけて
そを近ごろ爲に茶の花乃下に蓑虫のたら下るハ其俳人が其
の俳花を折して俳せる蓑虫も共に折られけりとハ
作れるにや茶にかゝるハ謹しんで作者の意を知る可し又蓑
虫ハ茶に播るゝ風情して蓑虫も茶の花と共に折られける
なりおもしろきハことふ由よし尓蓑虫之と私風情して又折
られるやおれけりしてふひぐくし

古寺の簀子も青し冬かまへ　凡兆

古寺の冬構へ蓑向して新らしき簀子様ハ実
年古るの見出し古寺の傳として細く青しみ文字

みて自ゆたかなる接の用と云ふべし

公孫の沼田の閑居をとひて

雑水のほとりの蘆ハみな　蘆　甚角

沼田の閑居をとひ侍るに雑水のほとりに蘆のみ多し那ゆゑとなく無しかの雑水の名所ハ例の普子の西園にして尋ねの人乃云生を庵のほとりに植し蘆の多く繁しのみなりけるものと賞して閑居をなぐさめ給ふらんかの西園の柔桔の風流ハいかもさぞ雑水乃ほとりに地を気ままにてちぐるを迎送伝ふ雑水乃名ハ自伝れる歟みな名ハ

なるべく多義せらるべきなんとひぐらしの多く西園のれうりに能ふ十分なる趣ハ自祖八翁の沼田閑居ハ雑幻住庵みての作なるべきれハ元集ハ幻住庵みての端書なり食数の雑炊なるハ文字なきつりでうずるへしかるに非ス祖翁の時代ハ第一の例みるべしひて假字(カリシ)度

古のうゑき牡丹乃花のまり　猿　伊賀　車来

冬牡丹の作ハ猿の源の心魂なり味ハ夏ハ牡丹なれ共冬かくるまりて玉ゐを花ハ花の志なるにかの物ハ寒さをめぐみなりて

まつ雅の洒落の手つゞき

草津

晦日もはしりこそいのこ餅　尚白

十月のつごもりは草津にて姥が餅を喰ふて亥子を祝しける意也廿日もはしりて姥をかける夕方のさ過行る句也姥は女の年たけし称也して走りと姥乃字魂之文晦日の字勤く姥が亥子として亥猪の餅勤らしと知る意也

神送水口まちまちる乃給　珍碩

十月朔日諸神出雲へおはしますときこえ送る心を神送りといふ十月晦日に帰りまします迎ふる心を神迎といふ今関東の俗に九月晦日に荒神の旅立おはしますとて其日を神送りといふ之住吉の神送りと同日之詳なる事ハ塩山井子出さまへ宴家の晦日句め意ハ江東の珍碩が近江旅亭の即事といふなり十月廿日より神迎といふ月まつりといへる秋の次やうやかなる目当そかし風の次声きゝさすまゝ秋晴れかゆり煙草に屯せしるれうゝや早行の旅人駒乃沓音雲助がる声に長持唄の旅情言外にえへまち水口まちまちといふ所魂之まちまちの三字にていかにも秋の次やら好子行の沓音をふみ向とハ味も無し水口といふ所時まの

奈良の駅かやぶきたるまゝにて人家のみなみ
ちらほらと西方にてるひ沈のまつむしゝかけて皆
こゑ一世なるべし　秋暮（エキロ）行音（イン）夜過山（ヤマ）とは杜荀鶴
白の伊勢国にて　ほたるかはらにとぶ或ハ石部にかゝる
こゑすゞしつるゝ人〳〵のなりたるこゑハその場の宜を定むべし
手ハ一句の意をよく切るべしよ〳〵

寒月新旦

雑まハり　みな〳〵　赤柏（伊賀）良品

寒月こゝに寒梅ほとゝぎすとハ新旦とハ朝日のほとり
何〳〵曉とハ元朝を元旦とハ同〳〵赤

柏とハ増山の井に云共工氏（キヤウコウシ）の子冬至にかゝりしが疫鬼（エキキ）と
なりて赤小豆ばかりをこゝ冬至の日ごとに粥をもて
是を掃ふと荊楚歳時記にも冬至にかゝ粥を作
新日にハあらうゝ〳〵て赤小豆の飯を炊るのことゝ云
されハあらうゝ〳〵ふるゝ雅名にして赤の仏膳とハ婦女
子の玄関にて赤の飯とハ俗名にて云ふ事〳〵　膳をかゝ
でかゝるなど例するの日本紀にもとくより予う俳諧多識
編に委〳〵説くゝ是ハ略す　夕の云ハ方にかゝの膳まハ
魚肉も野菜もなく只汁菜の物に赤小豆飯ばかりを
として言外の余意寒梅のきゝ毎にとゝ中の七文字に
梅出来ゝ又赤柏とゝ寒梅の余意梅とゝ

[illegible]して作りなる句意ハ[illegible]

水仙月の水を移すや水仙花　羽州坂田　不玉

句ニよりて虚をつきたるもの[illegible]祖翁の手ハ[illegible]
幻術乃事ニ[illegible]
句意ハ諸くの[illegible]
[illegible]
と思ふて[illegible]水仙ハ定て[illegible]炎暑の冷泉を移して
[illegible]
作[illegible]人くの[illegible]水仙の水ハ[illegible]を眼目やし[illegible]
云[illegible]句法にして初心の出[illegible]

[illegible]
土用中水仙乃根ハ[illegible]
[illegible]
実ニ居て虚に働くの[illegible]

今ハ世ハ句のむりしてやみの蜂　尾張　旦藁

[illegible]
[illegible]
向ひてハ[illegible]
なる[illegible]
[illegible]

こくしるハ之説悉して抜ろしきやの文字まて句はなるよう
此やの字まて蜂を流めて居るきみは作りみせたる大のむれ
てみその蜂は動うさん句意ハそのて又人も富貴なれハ
富貴をたのみて人は奢のたゝえなし若けれハ若き
をたのみて血気ふ本こる事ハ世の中の人は人を畏ざらず
いつしる頭の乗れをいとはき蜂かと蛸をて世の人ふむつて恥
しむの心厚くなり　るハいふ句之きまハ気きく〳〵て天富
貴乃人ふいましめ教由意ハ一所ある侍や後世は身のむ
天ハ衛ふ禮を無しして心を厚くせざれバ往生ハ得がたし
今世もたのむふる人ハ礼はいて交らずきハのたられバいづ
れの世も仁義礼智信の五つは捨て得かたしと知るべき

之は教論きるの句と深く味ふべし

尾頭乃こゝろもとなき海鼠哉　去来

此句は海鼠の形容眼前作の秀逸之此外ふ形容の句皆去
来る糟粕を遁るゝるかし紙筆は労するよ及ばん
再三吟誦して其の形容実に海鼠乃ある句なる味道
心もとなきとハ心ふ去て定めかたきを見ほとき来なり
なとゝいふと同し此句を蚯蚓にうごくされと海鼠とも
字眼ふして一句となりていふ説ハ去来る俳腸は探り得
ぬ説なり泥祖翁の俳肝ふわいそれかや尾頭なきとのふハ
尾頭ハいふ事ふしらんどハ大意は知らぬ説なり

一 秋しさもさ深山や汐干茶　伊賀　探丸

深山の中の磯先牛蒡の葉の汐干茶の味

かつをの香ばしき香に秋しかぶひや〜汐干茶のひめ言

はさもさ成るを因幡の俤しき実の秋ひや〜〜

なつ近時はそもそも向潮見の所より出てゆづ海苔

下れば

こもちたる多賀の名る丹みすぶ　尚白

近江多賀明神の名所の高宮駅の通り端に大なる石の名所

立り居中眼前伏みして外に見るものなきを石ろう

居ぬ見つかりと言るさま寒風の吹きまる所の孤情

さまもさやかつをや探〜えるる事　八名郡社と三十一丁と云

茶の湯とそつめるよ日ぬ　稽古帯　江戸　亀翁

八句古伝の遺風之宗鑑以来貞徳ふいりても式風を変

まり芭ふ〜をやうある伝宗因の風をいふ芭蕉古伝と云

序文ふいふ古今伝ひ〜〜一様の風ふ〜ぶ

変の風を示す之試ふ三句を挙

ふ〜しいつと宗ふたら　宗鑑

さ〜ふ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

山の端ふ月ハいてタ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

うしろ姿ひとへに道の柳哉　貞徳

道の芝や生き返りなん　〃

まいて口やさしくそなるべし　〃

かゝる所なくハ蓼くハ虫いかゞ　宗因

なる絃ハ何をもて口ぶるね萩の花ぶく　〃

小ぶかしく鶯とゆるぶの火達磨　〃

芭蕉の新かして祖翁改風無用の後ハさらに此風調を用ひなびされど其角杉山杉風調我作れり然て其祖翁のをゝばゝて字路以来の調ゆゑ大いに違へるゆゑハ其風の体ゆゑ和心のはゞかる場に古風ハ只縁語をもて俳言のゝゆゑして深ゆゑ俳諧ゆゑ蕉風ハ俳言洒落

深情を備ふ故以て本とせり梅亀公羽ゝ句ハ蕉の句ゆゑとて云ふ

ゝその多ふ業ゆゑ味ふ深ゆゑ物ふ深ゆゑ

おのく用ゆゑ元その下へハの字を係ゆゑ多ふ用ゆゑて彼と

先ゝ蛙ゝつゆゑ用ゆゑ元されハ蛙じゃの句じゃのゝ云て

とゆゑ言ふ面ゆゑ新ゝ句ゝ古ゝ句ゝ縁語ふ動ゆゑ

るゝゝ句ゝ句ゝ日ふ動ゆゑとゝ云ハ蛙ふつゆゑと云縁語を

陽ふ梵ゝ仏ふ縁ゆゑ蛙の句と一物の名句ゆゑて二物ふ

変てつゆゑゝと縁語ふ変ふなゝ句ゝ蛙元ゝ

の蛙句ゆゑてつゆゑゝ句ゝ蛙元ゝ言ふの意ハ蛙の句ゆゑ

風流の業ゝ句ゝすゝ句ゝゆゑゝ句ゝ蛙ゝ句ゝつゆゑ

き日ゆゑてつゆゑて蛙元古ゝ句ゝハゝ句ゝ句ゝ蛙ゝ句ゝ

人間一生の勤労は見るもの聞くもの士農工商よりの
勤勞にして労をすれば衣食住に安んじ楽しむ
ひろくたとへる句之花ゆえ蕉門の句ゆえ成句

炭竈ゆ手負の牡丹ゆ　信之　　九北

句意すぐれしと句勢すぐれし人の思ひ寄らぬ所
出しても炭竈の窯穴の手負の大猪飛入て倒
死るとは実ゆみるとの句ゆえ牡丹山中のさま
思ひやる為の亀翁の句調越人の夢の如不思議の仙九
北の句ゆえ一列のうちゆ風調作例區々なれば
して変化もされて見るもの変化心低今

先師の風ふうて一風ふちづくて変化成るさまを
てんぽの心ゆ達ずるを去年ゆ行る成よくし思ゆ趣

住つゝあ旅のこゝろや　冬至火燵　芭蕉

無落和尚の旅の世ゆ又旅掛して又枕草の中ゆ草成
居る所とよるものゝ居る所を思ひ合せて作りた面ゆと要る
いつゝ至大徒の実情成旅の心と引ゆけて魂と入るる夫
本集ゆ正二位季経卿ゆ如のうかれてゆゝ旅やうとすみ
はるゝうるさきものゆて旅ゆ出る先ゆのうちゆ入る思れて句意
実意ゆして不易の句ゆうと味ゆ趣　　みやこのものゆ
句情と探り求て俗ゆ成向上の場ゆ入る句意

冬十二

探こゝろやこゝろ蒲原のさかぬ内　其角

此句ハ實情にして探こゝろやの五文字に姿と情とを能現はし以てなかしいてなくてかゝぬの境姿情の備るなり

門前の小家もあそぶ冬至哉　凡兆

凡兆ハ醫を業とすこれハ冬至一陽殊に祝ふにあたる趣向ハ探幽にして理屈以て解す爰ら門前といふ所現はして姿情備れり小家もあそぶといふハ日よりの冬至理をいふ門前ハ他よして小家ハ自ゑしゆゑしまれハ凡兆寓居の地寺院門前なる趣し禁中にても祝ふものを家小家もあそびまして門前の冬至なるを

木兎やおもひ切たる昼の面　尾張　芥境

おもひ切とハ物我自他(ブツガジタ)の分別なき意也木兎ハ陰鳥殘忍(ザンニン)の性干して夜ハ小鳥を林中に追出して取喰ふ昼ハ終日眼のうとくして小鳥にも侮(アナド)らる是ハ物自他なし思ひ切て大悟(タイゴ)徹(ネン)念(ネン)の禅師もいふ爰き面つきと作意手法のしら心をてはよるはり架(ホコ)にまりたる梅保眼前の見るらめし

こゝつくハ眠る所をさしけり　伊賀　半残

發句ハつよく作意たしらん作すりと祖翁の去来に申されしる所の作例にして此句ハ諸鳥の眠る所を取食ふふ人ハ彼

ゑ屋の鈍き様窺てさして取くいふを之駆るといふ字魂
ずして本色様動くさるといふ彼々情をみ引
くて云ふ様の利鈍を遠ひと詰て聖教の中を捜る様射て
と成ものを生る義様猛くして云ふくくと駆るる様
天理変性のなすを知ずして人をみされるといふ
るを内の大敵の清のてくちる所〜

交

まゝ〜ハ人を紙るの切を譲りいふ　丈艸

黄金用ひ来りて交りくくいはれを世俗軽薄の人情
を欲息の向こきハ貧〜〜〜して交り益百ハ情貧様乎也

風交みして貧〜きを取ふ庶〜て又平ふ豆様補ひたすくの情
ひくくを安ち情様紙ものを述てくる句と意将軍〜果〜て
切を譲くくといふるを比ひ白言ハ貧〜きを交の厚キハ
莫逆の親友にして彼の切様を譲り賜ふ人貴公
もくるといふ言を様者の輝くるを布ものの切くを
多為も風俗もう貧るの切と云ふ風情ハ降ひ切くを
為を紙ものの切をくといふ事ものを言みの風情を味平

甫風や巴をくいてむ〜ものを　曽良

巴とハ水の渦に巻様を言くくるのくるくくうづま
ものを飛をくく様甫風のをげきを水羅されて深山の方へ

むかしくふるあぐきたれる母を白作れる物語てみるものあり
揚るもおろしたるもえうしと仰ぎ見つつ殿がりて花の
ちりてより眼前あと巴を岩に[illegible]して浦風の烈しきみちの
塚山なぐさむる姿を面影ふ作りたる多つ面に浦風の古
文字よく[illegible]て冬庸の風景ナカ〳〵多〳〵[illegible]の光の流手
巴形ちぎいはりてみるもみ面とるし回るみられ[illegible]巴
と[illegible]浦風ふみ面のみ[illegible]れるといくるハ気色家ふ
毎年風流丈〳〵[illegible]〳〵[illegible]〳〵[illegible]面
を回るこのあれ丈三四月ちぎ〳〵数多のみる時巴ちさあ[illegible]
形ちみ作と参考を趣〳〵みるの揚おろ〳〵ふ毎見景を尼
宗あて後岩間城解を面さ

あ〳〵塚やそ〳〵つ[illegible]列さる友衛　去来

行〳〵城のる砂をと尼ふつを[illegible]ものの眼前之前の白ハ
むし〳〵ちるみて深きちり[illegible]岩間を左〳〵いふ岩ちみ友城さを[illegible]
つ[illegible]て法[illegible]城を〳〵[illegible]ふ毎尼[illegible]
時冬〳〵古人の一字を[illegible]たるに[illegible]

狼の孫啓　清すや　濱くみる　史邦

ふるに狼と重[illegible]ふ[illegible]の城取合て一句の注定白[illegible]
啓庸を[illegible]ふ[illegible]て又ふるとふを[illegible]て[illegible]の字[illegible]濱
逸[illegible]て食城求る狼の[illegible]山陰の海岸ふ[illegible]の狼乃

[illegible]

背門口の入江

背門口の入江なる伊豆いづも田方郡漁村の名なれども新田
門口とは本てふものは海ハとなりて海の中に新田の林〳〵と言ふ
なれどもの名なるべし海より入江へ乗り出るとまるとの新田の
入江さみだれるといふ歌の入りに入るの時分迄くるさ

丈艸

[illegible]

いつくとも定まらぬ

千那

[illegible]

矢田の塩や浦

凡兆

[illegible]

にいくは梅か香の頃なるといふ歌の例も有る如く又歌にて
は其の名所の景物とされバ作せずとふぬことも俳家これに習ふ
ばいづれも其の景物有らずと成る故探りて其の場所に応じ為やうに
作るべきもの それハ文字を思ふしきるも也へ景物にて名所故つなぎて八分に
姿も情も作りがたきもの有りと心得有るべし 其ゆへ古来の翁に有る所
なり又名所神祇釈教の類やそれ切りても又下へ切字を用ひ二段に切る事
故祖翁より云傳へたるやうに世に人有りてやゝもすれバ二段に切る
未熟の俳士有り 祖翁の意味を意得ざる故の事也又名所のや切れ
といふ處は広沢や矢田の野やなどの切字あるといふ事是二段に切りたる之
段に切りて切字あるといふ未練の俳士に学ぶ故其ゆへさらし 翁も新
学のうちハ慥に切字一字に入て作るべし 名所のや切れといふ傳

ハ文字なし切字いくつ有るもよしあくまでもよしと云ふ事熟練の境
みしても其の境に入る時節を要し

武士の見かへる路や鷲乃中　木節

此句ハ武家る人の心なく我身の居る所を掉さし通りて路見
かへりたまへハ鷲つがひの巣つましき武に驚きおそれたれバ又此時に
臨むも不築るゝと云ふ見かへる路といふ字姿情を備へて中といふ字
ならる故動かざれ景色言外に見へたり

水底を見て来た顔の小鴨かな　丈艸

小鴨の浮沈するさま又かしこくも沈みかしこくも上に浮びて

新さ〜上て雲仙よりは自得の風情龍宮城とも
ひて来つゝん新つゝと水面服茶の系色暗の浮沈て
る物ほとて来て息といふ所まつ海の始りとて竹内

去来抄に野明問句の志ほり細くとハいふある物少や去来云
ハ憚なる句みたゝび細くたよりるさ句にあるべき志ほりハ句の路
ひ細くハ句を高ひ高き乾句を上て無ほて仏路通句成
上て先師此句細くたりと侍〜ひとしてきれハ句高の所よ
味ひ句〜湖水の水面風波をおく也用ちるにれ句の趣也
新ひ中ひ句ひ句やうひ〜て脚るうあくまひ句作れるとの句

るとこゝを海〜ひてみるの句ひ行る舞〜春のるとひ所ひ句
の魂やして春ひて句るとひ〜ひ金春の海ハ近江伊勢新
湖水の所〜ひて一里ひ生ひるひ〜入る山のふ志ひのやうを
新所成いふとゝや水上のひ〜ひなる所行ひ〜

死るまて揺ぬ雁のうを　旦藁

雁ハ法ひるのうち揺ひるひて法ひ雁ハ死ひも猶ハつひ
と武夫ひるたゝ〜ひうひ又ひ羽毛をおの〜ひて人のひ〜ひ
新ひ句ひ加ひて居る雁ひ面魂ひひて死ひるとひ揺
ハ雁ひ〜ひ雁の一句ひ作りて雁ひ新ひ死ひと
ひふひ雁ひ魂ひる句〜

禊巻子首引入てみその月　杉風

この水戸や潰のさくれてみその月　其角

去年拾ふ日猪墓撰の皆句は去年の月　其角

月明記得相尋處城鑽東風十五橋と云張喬の句も巡合せたる

冬三十

けさ本戸かるる夢迷ハ一句も大切なれハ筆へ出板ハ有ふたいて
き阪を〜〜元祝を築の戸は本戸さきる勝芳ち去年
云ハ月は撰の戸年寄て元ハ弓の光名元は城門
ふうつ〜て見ハ光ハ甚風情あれ物をこくいふさうう
な〜角ふ重ふ重ふ行ひるもてもうこと〜て白玄花
のめく珠門ハ元ハ惣門の戸なる〜〜るさ毎ふ教大の吠る影
ふとの凄く言ふ中ふ中を〜〜り平家物語の福原ハ影より後
大寺ハ光将実宮の旧都乃月ふ出て上りるひて越門を
たるうせらる其内ふ女の影ふて後ふや蓮生の爲ふて
らふ人ふ出ふ出ふ祭りれハ光ハ福原より大物屋の所の影
ひとり寸左ハ不惣門ハ漏ふさ〜ふてをふらふで出ふ小門

ようくとのくとや（下略）各色木のこゝ毎に異に合せて冬の夕の
凄きを取て格別力行りと味ひ奇〜

かうさつ　蕭寂　冬の孤　長崎　暮年

蕭寂自他の差別行り他に見る時は冬の孤は義に林（アハレ）
きゆふの方の寂寞形〜から風馬に山蕭寂を為て人なきを
引戻るを寂てる実に冬の夕暮〜と言ふれば蕭
自ら寂に付ては已しからさる山蕭寂を為て寂に付て寂
〜孤の異に言ふ出るを〜こゝを孤人と見て面け
る馬の吻〜まるとこるを已に冬ぶ自て賞ぶ心ゆきを
道といふ〜寂結の孤情び作りて〜て除きまさめり

冬部一

孤やるさ〜孤人さむ〜　石部山　大津在　智月

智月尼八乙州の母之白素前白の孤と同〜石部山
を寂に八の間ふての白ち石部山〜白〜元
山〜て寂結の寂色林〜に実地に付て深く味ひ
孤人の寂るさ〜〜〜る人に〜ぎる〜に石部山
と寂るを冬の抑抑他ふの地名に八ふて孤情と
考山面〜　元祖寂伊豆の幻術〜

菊生〜てさつ雪と見さや　代　金衣　美濃　竹戸

菊は師の姉るき金衣なるとら記あり異〜

此紙衾ハ祖翁奥羽行脚の時さる人の送りけるを也余連の旅
枕に見ひまひしものにて紙衾にして此用ハたつ雪を詠める
句あり而して翁の也余連の才に係ハて風情のこもり青除の
たまのをも遠ひ破きさる紙衾なれと狐腋（コキ）の白裘（ハクキウ）にまさり枕
まされりと竹戸か授ひとりいまや翁の風雅にあやかりて此
衾をかぶりて秋冬を詠めよき句をせんやといふ言を
首出してたつ雪見たしやと招る友作りける之翁の風雅に
はやかりて是ハ首出して世間の俳士と交はらんとのみ
を得意合ある句をなしと呼ぶし

紙衾記　　芭蕉

古き枕ふるき衾ハ貴妃か形見より傳へて恋て
いつ衾傷ミ鈴虫の音添の上にハ鴛鴦をぬひ
物にして婦人の趣手持の世を思ふ衛ハ其膚に
近うへき句ひ残りてまたも舞をや恋乃恋物とやんむ
へなりけりしいてや此紙の衾を得ハ恋をもあらん世の夢
多くの花の婆娑の俗屋にて蚕をいとひ羅の衣を好むのかふ
きを思ひて出羽の重宝とたに而して衾の人はもちるあ
はるさかも越路の衛て山雞野亭の枕乃上手ハ
二千里の外に月をなかし萬里もみさを得る
下に一和衆有衆人ものきまし須と呼て居所帳
を背中を負ひ三百余里の険難を経て路
ひ千里をまもし美濃の大垣の府にいる旅

再板ハ芭角一名ハ俳名也

心のうごきを俳諧の情を俳諧の情を俳諧の情を

所るを毋城白作り眼鼻のよくてやるせきとつふ所視と
名づけ

白川うさと数珠を思ふ細代書　文艸

数珠も思ひ代といふ所にて花菊と八ツ〳〵毎攻焼て細代書
事る氷魚をとる所にて氣にて取に多くとれるとなんされハその
名ある事る魚成ひまるくれさ毎ものさといふ言葉を記して
数珠を思ひ代ふ処視と知る事　移個の遥ふひまな
く魚を取〳〵つるものの世も志きさて〳〵面白や
といふ意字よる面ひてさろの五文字より細代書の白ハ
なりなる花好白と名る句〳〵俗世ハ法〳〵もいふ句き

成数珠ふなり〳〵る事俗秀逸〳〵る句〳〵　竹境祖〻翁の
現力みて初学のため立まき句き第二ハ細代書ハ延享三
年白山城の宇治近江の田上氷魚の網代各一處九月ふ始り十
二月三十日ふ至まで毎年成貢ものと見えたり今ハ細代木を
うつる九月九日よりもむるまで〳〵ろ木を打をと
川の早瀬に生付の杭成上廣く下狹く左右にをゝ打て
其下ふ狹き処ふ網代書の床成ひき毎火成たき川水のもの
杭乃中ふせれひるまつまてるの床成ひ養の上へより来る氷魚を
〳〵るもいつて氷魚ハ和名抄ふ鮎と名り白き小魚ハ名ハ
宇治川田上川近江の湖より　野川なと歌にあり
俳白成ふ候す

藤つるとふかしこまり屋敷孔　史邦

藤突（ツキ）はふす事の縁（ヘリ）つきたるをめぐる今の下世話などの
遣風なかしこまるといふ所に落もれ（さまりしと）蓑のおだ
るさま風情言外に見へたり

櫓桐の葉や手紙ひらく孔　野童

櫓桐の葉を記す所風に連れる蓑のさらしと塚をとも
さぢかるさま実ふみの新まきの庭苔実景の姿情言
外にひろ〳〵趣〳〵　櫓桐の二字おも捷ける庭の拵様詩人の
任かるる事〳〵趣〳〵

鵲の橋よりこかすなりけるとも　伊賀　示蜂

俗語ふ織女牽牛と七夕ふ一度會するを白るさる鵲銀
河ふ橋とありて織女は絍さ〳〵むるといへり信用するなた
されたる姫るゝ云伝へるるるかしてふ詩ふ鵲橋と作
きり公向ふ天の川ふ呼ける鵲の橋よりまるで〳〵
蓋を要る事やと思ひ乙ふ女ふ代ふて作りるそふ朗詠
集七夕の詩ふ露應別淚珠空落といふ句より思ひ寄る
詩句ふ〳〵ふ公ふ要る織女の涙の氷りるる鵲の橋より孔
蓋るふやと蓋を一指〳〵る作りて玉蓋とはたるる
ゆるへ〳〵事師年〳〵る毋実ふして鵲橋ハ虚ふ儒〳〵

呼うつし　鮒賣りの郎　丸北

[illegible]

[illegible]れ降る雪や[illegible]の生まるらん　膳所　西好

[illegible]

言外の学問[illegible]生まる迄[illegible]

の生まるを降る雪[illegible]

[illegible]

変る雪をながめ

うつ雪や内ふ居さうな人ハ淋　其角

内ふ居さうな人ハ淋[illegible]

[illegible]

[illegible]

初雪や[illegible]の[illegible]　史邦

雪の降るふ[illegible]

いふ味ひ[illegible]

[illegible]の[illegible]　羽紅

四位は九兆に書えいとけなきなるの趣ひよ雪まつけ〜〜たるうなぬ
こぐくるるよいとと〜〜息いかけていと面やる風情女の情ある
毎〜〜にてやることひぐくるの面の葉之切字のまさ句先水の所と
よく味の趣〜一句の意さくるさいかの字の偏なりと云不考ふ

わすれもるな紅葉のこすえ雪つけ　探丸

わすれもるハ家内自児と互の称すてるの字ニ別義なし　元歌
同じ又書家ニかぶりているすを切〜万葉集ニ家ゆ妹
伝の池ニ入みを〜と人丸ニ引ある歌ちと考ふ趣〜若女を恋
思ふ身通〜て用ひるる極て志の若ひことのさ趣〜句意
ハたをや女のかぶをさ又〜て雪をつけ〜〜るこみを所容せる

句ヲ〜て實ハ九兆の雪に身ら赤あ〜べとる趣〜紅
白の対合を雪濃とをうわをるいるうくしを女の姿と
ゆをて雪をつけの意句海情と備ふ真洞翁云わるもの
ち伐潤る雪〜和賀伊年毛のかを伊を約める語なれバくとい

下京や雪つむ山の夜の雨　九兆

雪を降雨秋雨寂の情都かをうと思ひ雪て下京ハ京ハ
言ハの事雨時の趣〜去年ハ雪ちと句をしめ冠ち先
師を始いろして雪作うて冠ハ極ふ九兆アト云ていと
蕉着ハ先師云兆汝ハ冠を雪へ〜義ヤさるもの
ハ京二雪ハ俳化をいふ趣〜去年云ハ句をるのよ九

[illegible]

なるしし川一筋や雲の原　同

[illegible]

信濃路をとるふ

雲ちるや稲屋の[illegible]　芭蕉

稲屋のすゝき六信濃路射山祭ふ芒の穂ゝ乃夜屋と迄るを子
稲屋の神ゝ云祭八七月廿七日ゝ撰集物ふ八ゝ法百のたけ
ふ八俳ゝ心ゝ[illegible]ゝ言のゝ[illegible]ゝ信濃路の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

の心ゝ成かゝげんゝみるゝ詞ゝハ係るゝ事ゝ詞ゝ有ゝて也ゝて同
一カの句ゝ詞ゝ成係るゝ及ゝなゝゝゝる句一句句ゝ句ゝハ
詞ゝ有ゝんゝゝの意遠ゝ事ゝ詞ゝ句一　裏老ハ老裏と
同一年　老おゝゝゝくゝゝゝゝゝゝゝるゝ心葩ゝ心ゝげゝゝゝゝハ香爐峯
の雪ハ簾ゝかゝげゝて見るゝゝゝゝゝゝゝ樂天ゝ句のゝゝゝゝゝゝゝ

夏草や壯健なるなかにしてたゞ夏草の孤りなるなり健といふ字は魂に通ずる

ひのみして行や夏草のてまごさ　去来

てまごさは引みて夏草を見る遠れり孤人のさまなり尋ねうめ〳〵夏草の所をよく知て動きなひつけ〳〵行くなる深なアをて夏草といふ情は知れり〳〵俳諧は猿州豊島郡に織出す者をいふ

青垣迄悼

乳のみ子世は海原に沈む　尚白

青垣は海を隔て才ある人なる故悼める句なり乳のみ子は世を海に沈むといふ知るもなき人〳〵親族の歎今思ひやらるゝなり行の涙を海に沈むとは魂の入る法なり

うゝ魂も空也の痩も立ての門　芭蕉

此句痩と涙字視こと知る趣〳〵うゝ魂の立中み南さるをすかゝびるさまと思ふもゝ空也上人の立中苦行のさまを鐵合て魂も空とかゝて夫は動くこと〳〵うゝ魂と空也上人とのうもる度中空風の吹さる言も尤也りて少なるこ再三吟して祖翁の幻術言葉

なる〻一赤子代の心の味ひ〻んと新日腸をさぐること
祖翁の所〻のひ〻といつる句ちをいよ〻味ふ毎〻心の味
と機微なる又空の字もかゝと別する句と思ふ毎〻又此句と詩
の互照双關を以て評する人なりさを此句ハ自然の場をイ
詩の格ふ〻ひたる所〻空也上人ハ延喜帝第二の皇子
詩〻〻を惜ハ新〻小川　乙州
此句詩ひたるさの新〻を学て又その人なる句作ありてその
詩〻〻の色里〻〻むくつけなるさを思ひやる愁て句を解
るものよ〻其情を探り求むるの者一人新〻小川句
を生よみ楊〻いふ所〻此句の又〻〻金さを

一月ハ家〻茅〻詩〻〻を　丈艸

此句一月ハ家〻茅を詩〻〻をとひくるゝ客ちの
多毎〻一先ゝ愛ふ憶色情貧の風情言ひ出ふ所〻
詩〻〻さの閑寂を賞して逢ふと一月の稽茅に借し
ことよと戯きるる所流ハ祖翁四者の一人なる毎〻再ハ
新を〻〻きて腹を満ふ為ふ床榻を〻〻〻〻〻
なる〻いふ心に風流ふ句作きる事未学ふ風騒余
人の及ふ所ふ〻〻色好ふ所ふ〻〻ふ所ふ〻〻ふ
〻数ハ古人憶色同日の論ふ〻して虚實の表ひ所れ
ち情貧ふ情更ふ一毫をへるのひまち〻又ことを

[illegible]

敲の閑寂殊勝の風情あるを愛す多きなれども多く貧者にして毎歩茶代なきなるべし然れども一月の茶を借りしの浦さきまでなれば[illegible]

[illegible]て[illegible]んとの[illegible]いふ意味[illegible]

[illegible]て四条坊門堀川の東[illegible]ふ行ひをしめ四十八歩曉てふ

つゝめる[illegible]曉の浦さきといふも又浦みの三昧所を寒中借養

[illegible]

住吉奉納

夜神楽や鼻息白し面の内　其角

摂州住吉明神奉納の句を納法楽の句ハ總てさらりと常

らに一言下よりて下しなるべし作る者をさる者

ひとり句歩神楽の眼おゆよりて古物の黒き面の内より寒

歩の鼻息白く少新よ面みへるるかゆ[illegible]

[illegible]

切るハ神祇の親句なるべ[illegible]ある俳古祖翁の俳意宗傳の

なるよ誤て神祇釈教名所の句ハ二位ハ切て宜しとなる侍べ[illegible]

切字ハ字數金未熟の業ハ舟を費して益なし其の熟伝ハ

至て一言ハ諭ものなるべし句ハ白きとせハ眼芳の所ハ[illegible]

仏を弱一白しとして現左月前かしてを掘といふ爲し
先を自然の道に帰すべきを別に求るにはべよく味ひ圓
まして安納の句に志めのうちと拾ひて晋子の俳格に
なる爲一今時蘆雪の筆を写すべし

節季俳諧又の名を紀行歌　伊賀　順琢

節季俳諧といふらせくせうとといふ言葉合て年の終り
いそがせ仕舞ふ又節季ひらきて世ちせ立て今年の分を
見とゞめて別に又分とする四位絶ると歌息の句も
句の表に節季詩の主任為ふ又みに命を好む色
を業にして作りなると俳諧一の名を何ちか

と言ふ事を

かくやうちいせしを　掛　伊賀　祐甫

学ぶ者の句をいやしきいふを言をとあてゆへ
かくちをいやしきを八あられ八什不くは中人以上
の者とは学ぶ者の弟の実情を見聞して十二月
十三日の句を宿屋一者の形と作る時分一

乙州の家宅にて

人を者をこのくせて元かい年　芭蕉

先徳遠の女情をして西行高調といふ趣一世の人ハ

弱法師家門のるせ俳の札　其角

什句五元集ニハ市隅ト題セル市中の片住居ト云題又寓の誤ナルベシ　弱法師ト云ハ謡曲外百番のうち

なる名月より異乙生ずるやうに仏法師ニ自他の差別なく
よく〳〵言とゝめて味ひ尽るべし〳〵　札ニハ乞食題より江戸町々
ゆる仕切札といふを張て物貰ひのまねやうニ料紙を以て仕切り
ゆる札紙ニ俳の札ニハ月並の仕切札ハもく何の年月並仕切
と書之又隙時の花屋法師ハ四角なる小紙ニ仕切ニ計ち下
を押さる紙張之紫雲俳貰ひの仕切ニハ只所紙押さる計の四
角なる小紙紙張て切之て俳弱法師の家門
ハなるせ俳の札ハといふなる家にて俳の札ちゝ底言舎
て作らるゝ之字句〳〵光国の札ちゝ〳〵舎〳〵幻術之古説ニ
ハ弱法師を盲目法師の乞食ニなりて家門ハゆるせ俳の札ち張
てなるゝと説ゝられてハ俳言ちゝ〳〵ゆるせの

云家も居らぬと云ふ舞ーー又謡曲の弱法師といふは河内の
玉高安の居家門廚通俗といふ人のみに俊徳丸といふ盲
にたりて乞食せしに成長ずる儘にまれとその旨見て乞食と
ていハ付句能書きーーその文句に業紙の人に付けるのまろびと
よひ彩波江の豆もとハよろしく寒も詠のよろ四ろしといふ
成晋る大酒の才のうーに雨ての一杯酒蔵とくるるーー
隙もしひの人とくて出けれ移と還陳乗の祇者といふ句を
もたりて思ひ合す舞ーー然程くの謡出に義ハ法の思ひとハよろと
よろりふーーとりふなど酒醸と弱法師とたち入の祇向と彩ーー
一句のうに終て理屈成以て解釈をくハ左の筋よりしハ市中
寓居所も眼前の場ものて酒蔵の思ひ句成すと彩ーー

宋の祇や曽祖父成ずけハ不ふ枕　長和

曽ていふ宋宋濃情ハ備りて魂の場と彩ーー宋の祇成者
言外よりくり曽祖父ハ祇ずちと例す舞ーー句意ハ大暗日の祇
の混雑を佐ぬハ四民ともに同情たりまるふをくの所移しみ
祇の文るとも隠居のるる思ひ寄ふしわやしと所ひとるる
如と居者のる思ひ出ーーめすおハすやら舞と書女又ハ
下女ホと尋られハ何男ちれ老翁衾衾なまとも云ハ
火燈ホ見さーーくなるふ枕ーーて在るふとすて嘆すま衾て
海ひるをよ風ひ引せすすちるど差岳する掃除と言外のこと味
思ひやらる脇枕とまんーーてふる枕とまるる百宋計の極

老翁の夢紐父子ハ学て手拍子

うす墨の一筆ハ仁のうとく　妙竹　去来

うす墨ハ一筆の境ひ大海日と元日とをかぶて去年と今年
と和の吟る宵まひたる紙幸の竹とさらす紙幸ハ海
て句作るとなるこ仁のうとくいとの無視こと新る句一種こ重の
要のまゝけ掛乞の切かゝ毎要紙ハ下の混雑一枝のうち
かたうて吹がゝ人の吟るとなる門松ハ走こと磨ったる玉
吹要と四海(シカイ)なるまゝ毎何といふ字ハ人くうりつゆ入紙て
なるあ〜ふいるるて去年とふとこゝと
いる歌のまゝみも通ひてこゝハ元新の歌ハ年年ゝの

俳句一筆ハ仁のうとく丹前の混雑するハ言ひて言ひ

ゝれて引年ゝけや伊勢ゝの　同

立春のい易とのかハ伊勢熊野春物多〜ゝれハ年月春乃
まゝけとの伊勢海老ハぶゝ田作ゝ蛇熊野炭鯉姫〜
注鯨ハ和ハ芸る越ゝれ伊勢といく熊野といく日本の神祇ハ一
ゝて一句の手柏たる俳〜伊勢熊野ゝて幸ハ春の同者ハ
注ハ言ゝ春ゝ言ゝと行ゝけするといる句とゝる人ハいて了ゝ言ゝ言ゝ
ゝ説ゝ主人ハ自の句ゝゝ〜と新ゝ

大ゝゝゝや子のとゝれゝる人ゝゝ　羽紅

此句初紅ら大晦日の述懐なれ人心いとゝ疎ま我機を見かぎりなる元人をとゝ寄まあ〳〵味ひ申し〳〵ものをれるとゝ多取をめといよ〳〵同し〳〵句意ハ元日より大三十日ハ和知をなるるるるるいろなれハ此やうなるあれこそといとゝしく心成きふハ家心の平生を行る事を成ふ事意なる故ふ成ハ那ハ才も心を労をるなる事〳〵さハ心なるなるとも幸しふ此ふ〳〵日まをりて同の学をるやうふさぶ思るるまを我ら和ら〳〵なるをハ己ら心の己ら自由ふなるあれハ梅ハ多取をめ

人心やといふ意

やりられてみやさむ〳〵ろ岩の芽　其角

此句物句元り多ふ業のめる晋る新行る句ら〳〵又その西落る活達の氣性見て やり紅てハ俗諧ふやりる〳〵どいふるなりて活付の多ふ成られこれを旦〳〵て補ふをいふこれをものやりる〳〵いふるるるるるるるるやり〳〵すを句るるるる家ハさふなりれやり紅ハやるる〳〵至るるといふるを五文ふ多ふ雪やるやる〳〵ふ品ふる句意ハりふ大晦日〳〵て年一ふ厨屋奥屋人屋栄屋芸彩屋〳〵掛乞のつゝひ本きるる夫くまかりを拂ひきり扨又なの義理ハ義理ふ金銭を呉を与て〳〵て又ふ一銭を紙られさむさふ業ふ家坂を意ふハ〳〵自得の句ふと新る句〳〵又やといふる詠ふ意味を考ふ句〳〵一言下の秀句なる句〳〵　許遠

作ふて言外作意ハ姑ふの業ふ

い祢しら人ゐいされつ亭の巻　路通

付句俗言以て一句の姿をなす事ハ祢と人の他ハ
くやいぬるうまぶいなぬるくやくい祢ちどいふ吉郷言ふて
いぬるハいさぬるこいなぬるハいあこい祢ハいけこ皆行の字
のつゝひ方ふして行をいゝ例する八紫紫集よりくれハ
古語こ句言ハりくや俗てゆけしと人ゐいれるハ已人
の用ゐたゝめ故ふ大略ゆのゆ法ゆいづをへ引をゝ邪ゝよ
ゝをるゝゐ義ゆて已妄用ゝる故云ゝて人のハ
さゝゆ故字ゆる言ゐよ時ふ命ゝ又或書ゆ位つゆ故の
ゐや亟巨煙ゝ句の同出よい祢しと人ゐいれても牧嗜

あゝ孫の恋ゝ恋ゝ恋を俺てゝみゝ付同云
の姿を取て亭の巻を巻る俳句より時ふ命ゝ　付同書家の巻
たゝ其八ゝ付句の引　史煙の條ふゆ
拠ゝ幸ふ出ゝ

亭ゐられ猪を巻ゝ毋の巻ゝ　杉風

世句言ゐふ姿を探ゝて解を毛ゝ句の上文字ふつゝて
解ゝて巻ゝ巻ゝ載ゝぶゝゝと八幾條といふるゆふして鯉
座藤を巻つゝ所用つゝゆるゝを袴ゝ人ゝ八彼れ袴ゝちゝて
ひゝぶゝの彩條ゐゝゝゝヤゝゝれゆ古袴よちゝたゝゝゝて亭
の巻ゐいてかゝゝさふ光ゝゝ毋ゝ毋ゝ姿を幾節ゝひゝ
もゝゝゝゆ古袴ひゝゝかけゝゝゝいふよゆゝるゝつ句ゝ又実

に袴を穿うとて男女とも紫苑形容の玄葉
と称する無一又袴一ツ二ツといふ成一條(スジ)二條といふを用つ
るゆゑ脇くゝむと事の未だ古袴の裏(カハ)幾重ぢ
とゝ生ずるうといふ言ちりとそる八文字の上乃解り
て姿情なり

特慕逆志抄巻之二終